

モーツァルト・オペラと恋愛結婚の成立

岡田 暁生 京都大学 人文科学研究所 准教授

[講演の概要]

モーツァルトが活躍した一八世紀後半は、ヨーロッパの思想界で「恋愛」とか「結婚」とか「家族」とかいった概念について、極めてラディカルな論争が繰り広げられていた時代でした。従来の意味での結婚とは、あくまで神の前で取り交わした契約であり、また家と家との経済的利害に基づく関係であって、夫婦には子供（財産の相続人）を作る以外の義務はなかったといってもいいでしょう。しかし「自由な個人」という意識が強まり、また教会の権威が弱まるにつれて、結婚は「外」の権威（神、家父長、家柄等）によってではなく、当人たちの関係の「内」に、その存立根拠を見出さなければならない状況が生まれました。要するに「自由な個人同士の自由な恋愛」が結婚の、ひいては家族の基盤となり始めたのです。しかしながら、客観的拘束力をもつ「神との契約」とか「経済的利害関係」ではなく、「愛」という極めて当てにならない情緒を結婚／家族の基盤にしてしまったことから、様々な難問（アポリア）が生まれてきます。「いったん結婚した以上、パートナーを死ぬまで愛さねばならないのか?」、「愛ある婚外の関係と愛のない結婚の選択を迫られた場合どうするのか?」等々、モーツァルトのオペラにはしばしば「パートナー交換」という（近代モラルに照らすと随分不謹慎な）主題が出てきますが、当時の人々にとって実はこれは、極めて切実な人生の問いだったのです。

[プロフィール]

大阪大学文学部博士課程単位取得退学。ミュンヘン大学およびフライブルク大学で音楽学を学ぶ。京都大学人文科学研究所准教授。文学博士。専門は一八世紀から一九世紀の西洋音楽史。著書『オペラの運命』（中公新書、2001年、サントリー学芸賞受賞）、『バラの騎士の夢』（春秋社、1997年）、『西洋音楽史 - クラシックの黄昏』（中公新書、2005年）など。